

平成26年度

郵送がん自己検診を実施します

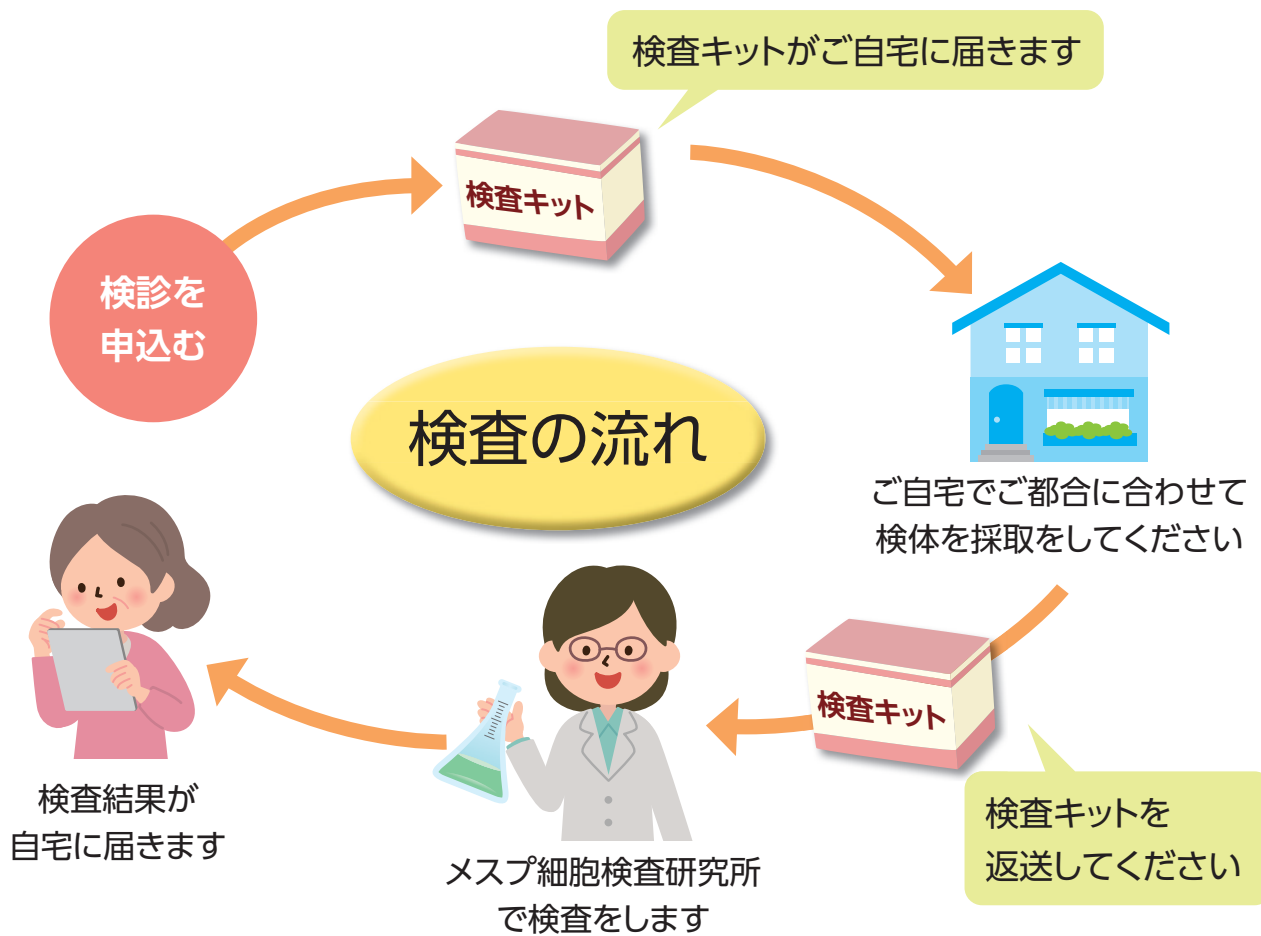
早期検診による早期発見は、がんに対抗する重要な手段です。

郵送方式による簡単な検査ですので、ぜひこの機会にご受診いただき、ご自身の健康管理のためにお役立てください。

※実施要領・申込書等は同封の案内をご参照ください

検査の流れ

お申し込みから検査結果が届くまで



検査結果の内容

- ①検査結果通知書
有所見者には下記のものが同封されます。
- ②検査結果の見方と注意事項
- ③弊社へのお問い合わせ用カード
(医療機関紹介・紹介状作成のご案内)
- ④医療機関受診後に返送頂く
アンケート用紙と返送封筒

メスプ細胞検査研究所

お気軽にお問い合わせください

- 医療機関紹介：受診者に配慮した医療機関のご紹介
 - 紹介状の作成：病床数200床以上の病院を受診される場合は是非、ご利用ください
 - 検査へのご質問
 - 検査結果へのご質問
 - その他
- TEL 075-231-2230(平日9:00~5:00) FAX 075-211-7400
メール mail@msp-kyoto.co.jp
ホームページ http://www.msp-kyoto.co.jp

子宮頸がん 検診を定期的に行えばほぼ100%予防できます。

子宮頸がんはヒトパピローマウイルスの感染により発生。女性の8割が一度はかかるありふれたウイルスです。

子宮頸がんになるまでに通常数年から10年以上かかります。定期的な子宮頸がん検診を受けていれば、がんになる前の段階で発見し治療することが可能です。

細胞診とHPV検査で女性にもっと安心を!

この検査は、13種類のハイリスク型HPVへの感染の有無を調べるHPV検査と、通常の子宮頸がんの細胞診が一度の採取でできます。これにより、がんになる前の段階の発見率が飛躍的に上がり、子宮頸がんへの不安を軽減できます。

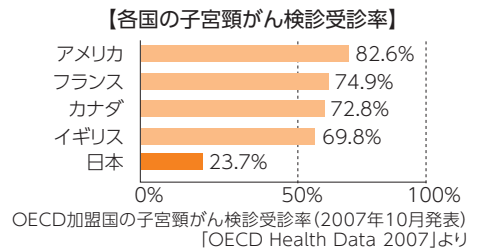
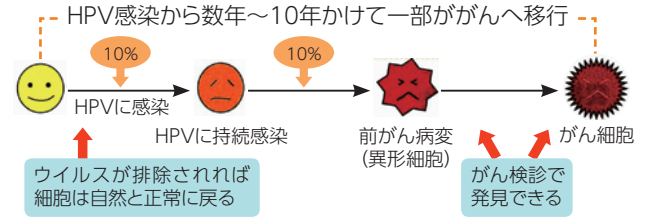
HPVワクチンだけでは防げません。

15種類のハイリスク型HPVのうち、子宮頸がんワクチンで防げるのは、2種類(16型と18型)だけです。

検診を受ければ防げる子宮頸がん

日本で子宮頸がん検診を受けている女性はわずか23.7%。先進諸国に比べて極端に低いことがわかります。

検診さえ受ければ確実に防げるのに、検診を受けないために、がんが進行してしまってから発見されることが多いのです。

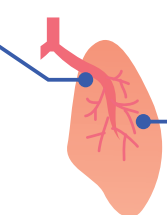


肺がん 中心型早期肺がんを発見できます。

- 胸部レントゲン検査で見つかりにくいタイプのがんに有効です。
- 喀痰細胞診は中心型早期肺がんの唯一のスクリーニング法です。

肺門部・中心型肺がん

喫煙者に多い…せき、たん、血痰などの症状
※**喀痰検査**で発見!
肺が脊柱・心臓に隠れるためレントゲンでは見にくい



若い人、女性にも多い **肺野末梢部がん(腺がん)**

初期は無症状
※レントゲン検査で発見(喀痰検査でも発見可能)

近年増加! **肺野末梢部がん(扁平上皮がん)**

喫煙だけでなく、拡散している煙などを吸うことでも発生 ※**喀痰検査**で発見!

◎喀痰検査はハイリスク群に特に有効!

- タバコを1日平均20本、30年間吸っている人(たくさん吸う人) 喫煙指数600以上
- 6ヶ月以内に血痰のあった人
- 過去に喫煙歴のある人

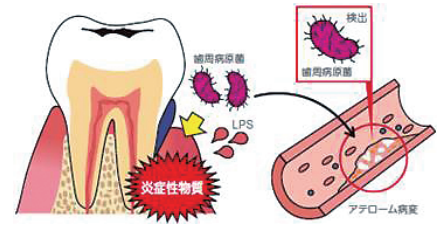
! タバコを吸っていない人にも有効です

- 大気汚染・受動喫煙との関係もあります。
- 治療が必要な肺がん以外の疾患も見つかります。

歯周病 歯周病は全身疾患のリスク因子となります。

歯周病が進行し歯周ポケットが深くなってくるとポケット内の細菌が歯肉の上皮を通り抜け血中に入り込むといわれています。

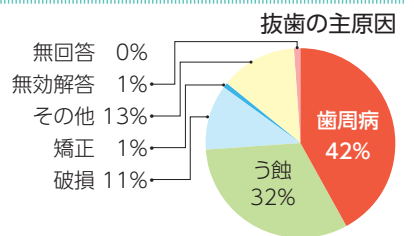
最近の研究によると、歯周病は口腔内の疾患にとどまらず、動脈硬化、心疾患、早産・低体重児出産、呼吸器系疾患など重篤な全身疾患のリスク因子となると言われています。特に糖尿病とは深い関係があり、糖尿病の方は歯周病の状態を管理することが大切だと言われています。



歯周病が進むと細菌が血中に入り込み、全身疾患を引き起こすと言われています。

歯周病はかかりやすく治りにくい

歯は一度失ってしまうと二度と元には戻りません。年齢を重ねても心身ともに健康な生活を送るために、健康な歯は欠かせません。歯周病は成人のおよそ85%、推定9,000万人に広がる生活習慣病ですが、早期治療により改善できます。早めに治療して血中に侵入する歯周病毒素を防ぎ、口も体も健康な生活を送れるよう、まずは検診から始めてください。



Source: 「永久歯の抜歯原因調査」財団法人8020推進財団、平成17年3月

胃がん

胃がんリスク検診をご存知ですか？

胃がんリスク検診とは？

「ピロリ菌」感染の有無と、「ペプシノゲン」という胃粘膜の老化(萎縮)を表す物質を測定することで、胃の健康度(胃がん危険度)を評価する検査です。

		ヘリコバクター・ピロリ抗体検査	
		陰性	陽性
ペプシノゲン検査	陰性	A タイプ	B タイプ
	陽性	C タイプ	



A タイプ



健康的な胃粘膜で、胃の病気になる危険性は低いと考えられます。

B タイプ



胃かいよう・十二指腸かいようなどに注意しましょう。

C タイプ



胃がんなどの病気になりやすいタイプ。内視鏡による定期的な検査を受け、胃の病気の早期発見・早期治療に努めましょう。

ピロリ菌

ピロリ菌除菌で胃がん予防

ヘリコバクター・ピロリ菌が胃の粘膜に感染すると炎症を起こすことがわかっています。

また、潰瘍の方ではヘリコバクター・ピロリ菌の感染率が高く、除菌治療により難治性潰瘍も治ることがあります。

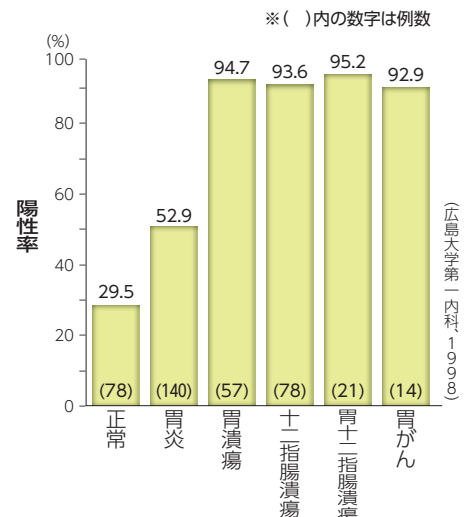
菌に感染すると体内に「抗体」が作られます。この抗体を測定することで「感染」の有無を調べることができます。



ピロリ菌を除菌し、発症予防！

ピロリ菌を除去することで、胃がん・十二指腸潰瘍の発症リスクが1/3に軽減され再発が抑制されることが知られています。特に慢性的に胃の不快感をお持ちの方は、除菌により、胃の状態が改善されるので、検査結果が「陽性」となられた場合は除菌をお勧めします。

抗ヘリコバクター・ピロリ抗体陽性率 (内視鏡検査で診断が出来た59歳以下の方での陽性率)



各種疾患において高い確率で、抗ヘリコバクター・ピロリ抗体が陽性になっています。

大腸がん

早期発見・早期治療により、ほぼ100%完治できます。

大腸がんは増え続けています

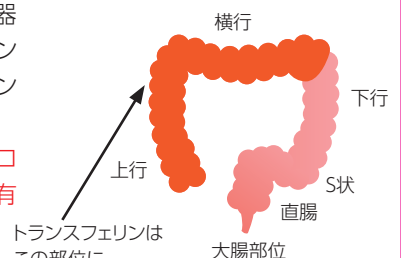
- この30年で罹患数(かかる人)は**6倍!**
- 将来予測でがんの罹患数**第1位!**
- がん死亡原因：**女性第1位! 男性第3位!**



一般の自治体や人間ドックの検査よりさらに精度の高い大腸がん(便潜血反応)検査です!

この検査は1本の採便容器から一般的なヘモグロビンだけでなくトランスフェリンも同時に測定します。

深部大腸の病変(ヘモグロビン陰性がん)の発見に有効です。



トランスフェリンはこの部位に特に有効です。

肝 炎

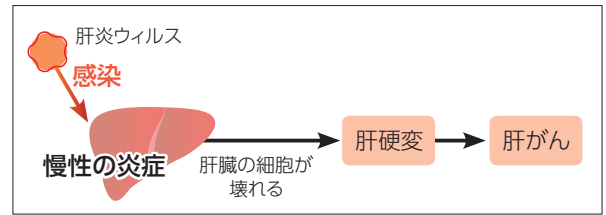
重症化させたり、知らないうちに他人に感染させたりしないために。

<ウイルス性肝炎とは>

ウイルス性肝炎とは、肝炎ウイルスに感染して肝臓の細胞が壊れていく病気です。

この病気になると、肝臓の機能が失われていき、ついには肝硬変や肝がんに至ることもあります。

B型及びC型肝炎ウイルスの患者・感染者は、合わせて300万人を超えていると推定され、国内最大級の感染症とも言われています。



<医療費助成制度>

国と都道府県では、医療費について負担額を軽減する助成を行っています。

重症化させたり、知らないうちに他人に感染させたりしないために検診を受けてください

肝炎ウイルスに感染していてもほとんど自覚症状はありません。

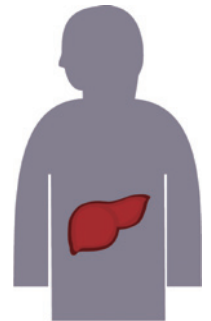
知らないうちに他の人に感染させたり、肝硬変や肝臓がんなど重症化して発見される場合もあります。

早期発見で進行を防ぐためにも、感染の有無を確認しましょう。

少なくとも1回は肝炎ウイルス検査を受けることをお勧めします。

ウイルス性肝炎の感染経路

- 肝炎ウイルスが含まれている血液の輸血等を行った場合
- 注射器を肝炎ウイルスに感染している人と共用した場合
- 肝炎ウイルス陽性の血液を傷のある手で触ったり、針刺し事故を起こしたりした場合
- 肝炎ウイルスに感染している人が使用した器具を適切な消毒などを行わずにそのまま用いて入れ墨やピアスの穴あけなどをした場合
- 過去の集団予防接種の際に注射器の連続使用が行われた場合



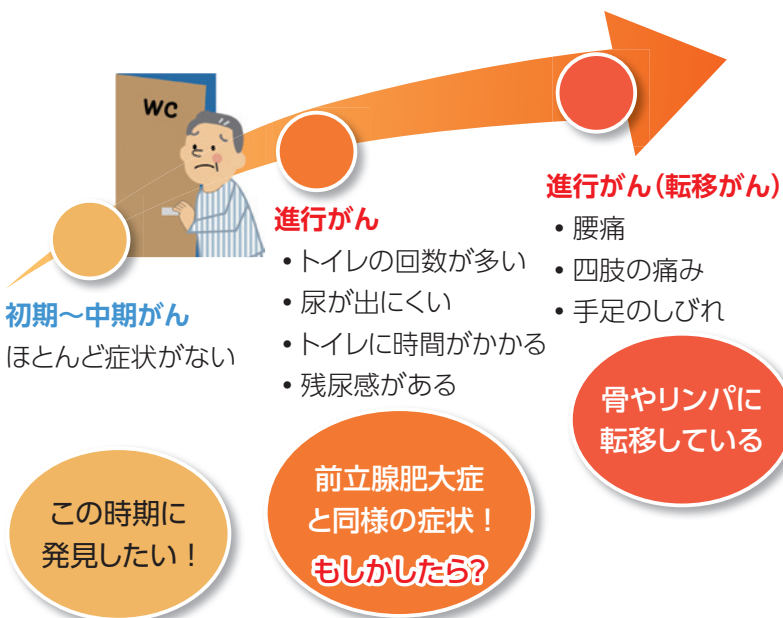
前立腺がん

簡単な血液検査で診断できる「PSA」検査

前立腺がんは中高年の男性に多くみられるがんで、アメリカでは男性のがん罹患率で第1位、死亡率では第2位です。日本でライフスタイルの変化にともない罹患率が急増しており、2020年には肺がんに次いで第2位になると予測されています。

しかし、前立腺がんは他の臓器がんと異なり、進行がゆるやかで、効果の高い治療方法が多いため、早期に発見すれば、治りやすいがんです。検査も非常に簡単で、血液検査でPSA値(Prostate Specific Antigen=前立腺特異抗原)を調べるだけで、かなりの確率で判ります。

PSAとは、もともと前立腺内でつくられる物質ですが、前立腺がんになると、血液中での量が増えます。PSA検査では、血液中のPSA濃度を調べることで、前立腺がんの可能性の有無を診断します。



50歳を過ぎたら年に一度はPSA測定を

前立腺がんは早期のうちに発見できれば、治療法の選択の幅も広く、完治する確率も高くなります。

「早期発見・適切治療」のために、50歳になったら、1年に1回PSA検査を受けるようにしましょう。

以前受診したときに正常値だった方でも安心はできません。前立腺がんでは、PSA値が徐々に上昇していくため、定期的に検査を受けて、PSA値の変化をチェックすることが大切です。

なお、家族歴がある(近い血縁に前立腺がんになった方がいる)方では、前立腺がんのリスクが高まるとされていますので、40歳になったら、定期的に検査を受けることをお勧めします。